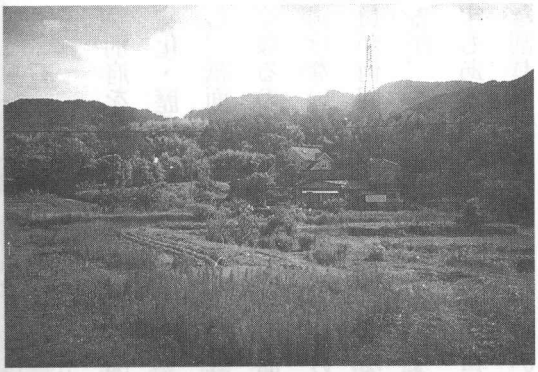
北から別府へ

手嶋宏治

◇豊前路から豊後路へ

陸路の陸の字、ロクと読み、坂でない平坦の意を表すという。そう言えば「ろくい道の方にしよう」などと、車の荷の重さで道を選んでいたことを思い出す。

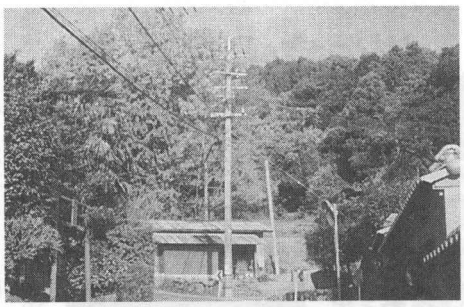


向野から地蔵峠を望む

北九州から宇佐まで、豊前国内は確かにろくい道だが、古来豊後へ通じる道を探して、どれほどの人たちが苦労したことであろうか。

古代に駅馬の配置された駅として、宇佐・安覆・長湯が登場するが、これは西の内陸ルート。

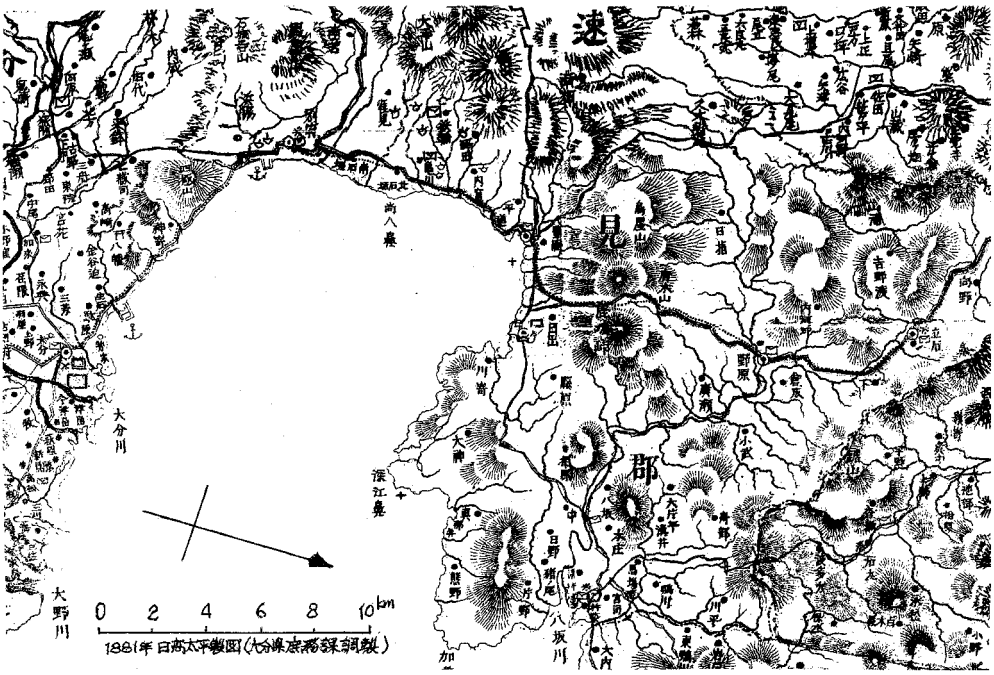
守護大友氏は豊後国に君臨し、度々豊前国まで軍勢を繰り出し、山野を縦横に駈けめぐったが、乱世が鎮まると大名の城下間の連絡路が公道として整えられるなど、情勢が変化した。元禄七(一六九四)年『豊国紀行』を著わした貝原益軒の選んだコースは宇佐・高田・田染・波多方・木付を結ぶ波多方往還で、波多方峠は標高が四二〇メートル、北の平山・南の五つ石の急坂が難所であった。これは遠回りの東寄りルート。



五ッ石の坂の南ふもと(杵築市乙王地区)

旧道は、ここから真直に電柱上端の向うの峠をめざす急坂が通じていたが今は全く廃道。波多方往還の難所五ッ石の坂である。左手の稲荷鳥居の向う隣の民家はもと車店と呼ばれて茶店だった。(貝原益軒は夕刻ここへ下山。)

両者の中間コース立石・日出経由で頭成にたどり着いた古川古松軒は、よほどこたえたとみえ、「是迄の道筋山分にて、甚だこまりし事なりき。」と民情のひどさに加えて『西遊雑記』(天明三年=一七八三)の中で書き添えている。難渋したことはわかるが、立石―日出間がどの経路だったかは明らかでない。



大分県史　近代編Ⅰ　折込の『大分県管内地図』の一部

キリスト教宣教師として名高いフランシスコ＝ザビエルが天文二〇（一五五一）年冬、山口から帰国の船便を求めての徒歩の旅で、鹿鳴越の難路にさしかかると足が腫れて疲労の極に達したが、それでも屈しなかったとか、『日本西教史』の引用などで伝えられているものの、訳した地名が現行地名とくいちがうなどして、まだ解明しきれてはいない。

豊後入りの本道は中間コースの一つで、宇佐から向野・薫石・立石を経て野原（中山香）を通り、二文字の渡りで八坂川を横切ると、そのまま鹿鳴越火山の山裾から緩斜面を山頂めざして登りつめる。しかしそこには山頂ならぬ断崖が待ち受けていて、間隙伝いに一気に下り、ふもとの長野から日出方面、豊岡・亀川方面へと分岐している。

また一方、戦乱の世では素早い対応が求められ、間道利用の巧拙が生死を分けた。杵築市山香町の勢場地区は、明治以降数度の開拓入植地となったが、天文三（一五三四）年満を持したはずの大友勢が、間道で背後から来襲の大内勢に不意討ちされ、混戦になった古戦場跡でもある。宇佐・向野から南下し地蔵峠を越え、山浦・勢場を通り、日指・西福寺・常盤を経て西鹿鳴越峠からこれまた急崖を下って山ろく山田地区に出、日出・豊岡へと分岐するコースは、大内勢の利用した

宇佐・佐田コースと共にそれなりの役割をもった間道であったと言えよう。

中間コースのうち更に西寄りなのが宇佐（駅館）から矢部・泣別峠・佐田・上の原・六郎丸・大内ケ平・能原・十文字を経て別府へと直行するルートで、貝原益軒が別府からの帰路に選んだのは能原みちと呼ばれるこの間道であった。高原上の草原は山麓の農民らにとって重要な秣場でもあった。

◇古道をたどって山香まで

山国川河口右岸低湿地に構築された中津城。奥平氏一〇万石を支えた城下町が核となった中津市街地。国道一〇号もJRもその一角を駆け抜ける。しかし古代の官道は城の南三キロメートル、条里遺構の向きに沿って豊前市・上毛町から山国川を渡り、高瀬に上がると沖代平野を経て大貞に着く。洪積台地の開析谷をせき止めた三角池が薦神社の側にあって、宇佐神宮のご神体として調製される真菰はこの池で刈り取られ奉納される。

次の伊藤田の洞の上集落に鎮座の古要神社は、中津の対岸小犬丸（福岡県吉富町）の八幡古表神社と並び上毛郡・下毛郡を代表して、共に傀儡子による細男舞や相撲を演じ、八幡宇佐宮の放生会神事に奉仕してきた由緒をもつ。両社とも主祭神は息長足姫命つまり神功皇后。また放生会の始まりは天平一六（七四四）年八月のこととされている。

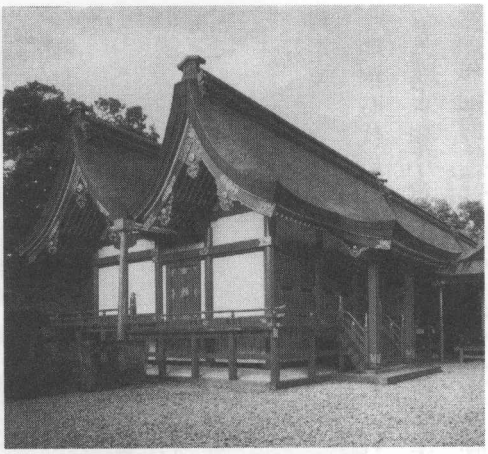
宇佐をめざす古道は飛永から宇佐市に入る。前後して左右からの新道に挟撃され鎖状と一本化を繰り返すうちに二つの大屋根が目立つ四日市に着く。幕府領の陣屋跡を足場に宇佐郡役所が置かれ、東・西の両本願寺別院の門前町も兼ねた四の日の市の立つ町だったということになるが、宇佐市の中心は最近では古代宇佐駅家のあったと目される駅館地区付近にその機能が移り始めている。

駅館川氾濫原はここから左岸下流に展開するが、中央の三軒屋集落を撤去して第二次大戦時に海軍航空隊を配置、戦局急迫で特攻出撃基地となった。緑一色に戻った滑走路跡の片隅に幾つかの掩体壕が空しく取り残されている。

瀬社橋を渡り北宇佐の台地を越え下り坂になると古道に面して凶首塚や百体社など放生会ゆかりの古跡があり、神仏習合の色濃い作法で大量殺りくの犠牲となった隼人族への慰霊の場とされた。

古道を直進するとイチイガシの森に覆われた小倉山の神域

に入る朱塗りの屋形船まがいの呉橋に着くが柵で足止めされる。高貴な参詣者の専用かと思わせるが、過去幾度となく派遣された奉幣使のご一行も左へ迂回し、正面の神橋から神宮境内入りしたそうである。



八幡造の国宝　宇佐八幡宮本殿

二礼四拍手一礼が作法という宇佐神宮は祭神も三殿（国宝）に分けて祀られ、一之御殿応神天皇、二之御殿比売大神、三之御殿神功皇后となっていて、全国二万五千以上という八幡社すべての元祖に当たる最古の八幡宮でもある。最大の特色としては、仏法の助けで八幡信仰を定着させ、東大寺造営や道鏡事件で中央政界にも名を広めたこと。しかし宮寺共存共栄を演じた併存の弥勒寺は、武家政治にはなじめず衰微して、幕末に至り廃寺となった。

宇佐神宮から南南東へ尾根伝いに六キロメートル標高六四七メートルの御許山山頂近くに神宮の奥宮としての大元神社がある。山の東麓向野からは杵築市山香町。つまり既に豊後であり、ここから悪路になるのは勾配が急なばかりでなく土質のせいでもあった。

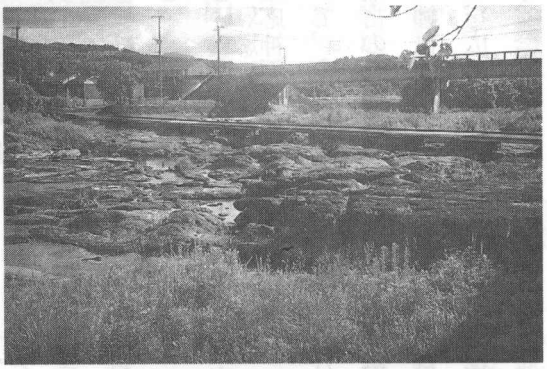
国道一〇号と並行してきたＪＲの線路は西屋敷駅から左右に分かれ、大分方向へは長いトンネルを抜けると立石駅。右は旧線で一九一〇年やっと中山香まで開通したものの千分の二五の連続勾配に補助機関車が救援の難路だったが、電化で解決され、現在では宇佐方向への上り線に用いられている。

古道は村里の耕作路や社寺への巡拝路を利用し峠路と繋いだ。向野・薫石・平原・船・立石間もその一つであろう。

土質の悩みは地盤の凝灰角礫岩等が地熱で変質し粘土化や地滑りを生じていることであるが、他方そのため金銀鉱床など貴重な地下資源も蔵していて、立石の馬上金山は大正時代（一九二〇年前後）最盛期には日本一の金産出量を示し、佐賀関製錬所の建設を促すほどだったという。また浅い谷底の沖積地が随所にみられる盆地は良質な山香米産地でもある。

◇のぼり七キロの鹿鳴越道

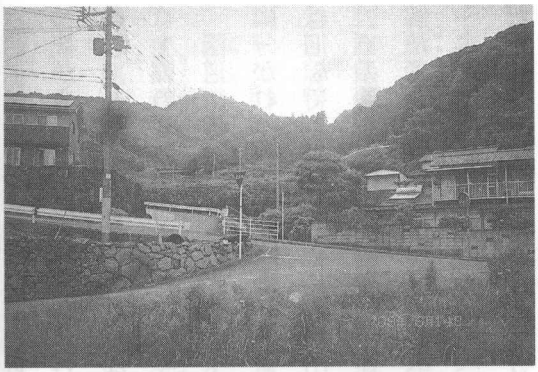
ＪＲ日豊本線の中山香駅。上手に当たる西方から駅前へ出るには踏切を渡る。両隣の立石・杵築両駅もなぜか似ている。でも駅前通りが表裏二本化しかけるほど繁昌していたのはここの若宮地区が随一であった。ここから恒道を経て立石川・八坂川沿いに下ると、南北の地塁に挟まれた大川司の峡谷部が行手を阻み迂回を余儀なくされていたので、避けて野原から南へ八坂川を渡り正面から鹿鳴越の険に挑む直行路線が幾筋か発生し淘汰されて、概ね本道が固まったものとみられる。



沈み橋の二文字渡と新道の龍頭橋（福林を望む）

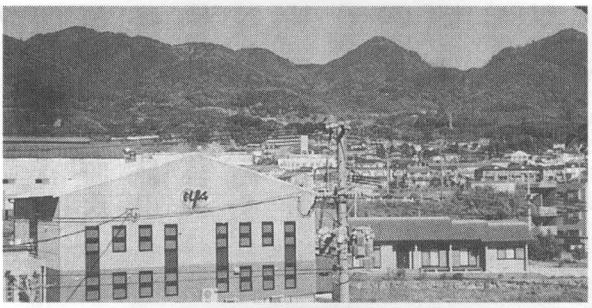
明治時代になると呼称はたびたび変わったが明治二〇（一八八七）年小倉と大分を結ぶ国道三五号線の一部となった。この年別府・豊岡間には乗合馬車の便が開けており、鹿鳴越道では車両交通に対応できないとあって、四間幅の新国道建設が日出町赤松峠経由で峡谷部を貫き進められ、明治二五（一八九二）年には三間（五・四メートル）幅で野原若宮を経て立石まで開通した。鹿鳴越道の国道としての役目はこれで終わったのであるが今一度旧道のコースをたどろう。

まず八坂川。凝灰岩の一枚岩からなる川床は凹みだらけ。川岸に寺の仁王門がありその扁額の阿吽二文字に因んで名づけたという二文字の渡りを伝い歩きで渡る。対岸の福林までは堆積した砂岩の地層。そのすぐ先から頂上部を巨大な別府湾カルデラに奪われた鹿鳴越火山の裾野。刻まれた谷は森林、尾根筋は原野。道は無人の尾根筋をたどるが、峠近くには日出藩が防犯と救難対策のため農民数戸ずつ、東鹿鳴越道の徳田、西鹿鳴越道の常盤に移住させ、生計の足しにと扶持米を与え援助したという。徳田



西鹿鳴越山麓の山田地区

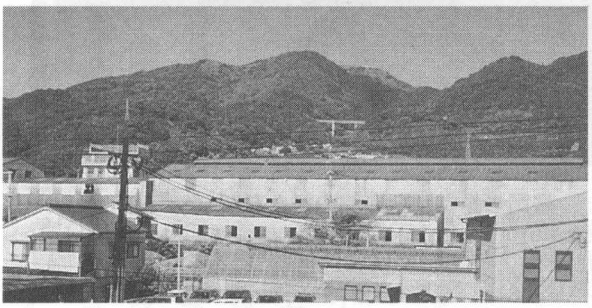
集落は既に無住となったが、近くに第二次大戦後の開拓集落や牧場が点在し、明るい風景をつくり出している。



豊岡海岸の島山から東鹿鳴越を望む

連峰の鞍部2か所のうち右が東鹿鳴越峠。460m近い。

その右は古城跡。左の鞍部(凹み)の向こう側の谷に徳田集落があり、東鹿鳴越峠に通じていた。



豊岡海岸の島山から西鹿鳴越を望む

連峰の左手へ目を転じるともう一つの鞍部があり、常盤地区へと越す旧道があって、西鹿鳴越道と呼ばれた。手前の山腹を縫う高架橋は空港道路。その眼下に、わき水の豊富な山田集落がある。

◇豊岡辻間

「夜道に日は暮れん。」月明かりを頼りの峠越しは汗知らずで、昔は日常的であった。しかしその先が険しい断層崖、海岸まで四六〇メートルの高低差とあって下り急坂一・五キロが格別難路であった。

麓の長野地区は日出・豊岡両方面への分岐点で、崖下の湧水が中継され町の上水道用の配水池がある。また近くには大乗妙典石書塔が建っているが、日出藩主が成敗者供養のために建てたとされ、村外れの処刑場跡とわかる。ここから日出城下への旧道は団地造成で分断されたが日出村と辻間村との境界線でもあった。

その辻間村は豊後国図田帳では、北条貞時（相模守）が地頭職をもち日出津嶋七〇町歩を支配したとわかる。のちこの地の支配者になった大友義鑑は、武功に対する賞としてこの地を辻間村と称することにし、配下の津嶋為久に与えた。為久は八世紀にこの地を開発し私領とした津嶋氏の末裔であるが、以後は辻間氏を名乗ることにしたと伝えられている。

困ったことに江戸時代初頭、辻間村は二分され、東部は日出藩、西部は森藩に属すこととなり、しかも境界が入り組ん

で飛地すら生じた。鎮守・檀家・水分から網代に至るまで煩わしい争いが続いたが、ついには誤解防止のため日出側を津嶋村と改めた。

明治に至り本来の辻間全域のほか頭成村まで併せ豊岡村が発足したので、以後は豊岡地名がよく使われるようになった。

江戸時代大庄屋となった辻間氏は、八津嶋神社の傍らで神職を兼務し、改姓して代々城内久兵衛を名乗ることにしたといい、邸内の魚見桜の老大樹は春を告げる彩りで人々の期待にこたえている。

豊岡の島山から連繋の村々を望む

正面の兜山（羽衣山）の右は森藩領の頭成。左は幕府領で、川を境に右の小浦、左の小坂と２村が並ぶ。

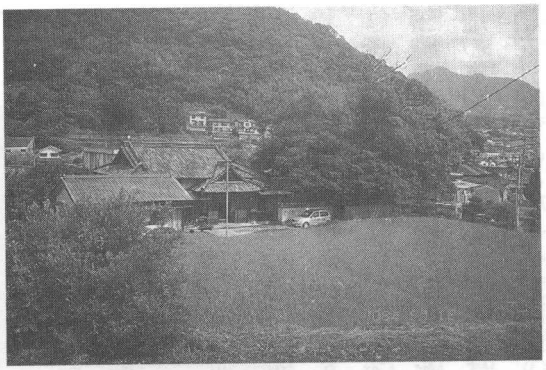
左手遠景の山々は能原・十文字原を取り巻く火山群。近景の丘上に建つ白い別府湾ロイヤルホテルが目をひく。

◇小坂庄屋旧宅

港をもち小商いもするが継送できる駅馬はもたぬ半農半漁四〇戸の村小浦。浜蔵を守り海に面する丘に住みながら網代をもたぬ八〇戸余りの村小坂。隣合わせで共に幕府領というのに、そうまで機能分化した背景は何だったのかと首をかしげたくなる。

両村の境界であった江上川の河陽側が小浦で、森領だった頭成から南へ旧国道をたどると、右手から兜山がせり出した崖下に地蔵尊がまつられここから幕府領だったが、二つの入江湊の利便さと鹿鳴越の難路を控えた休息適地で商業・交通上の要地となった。

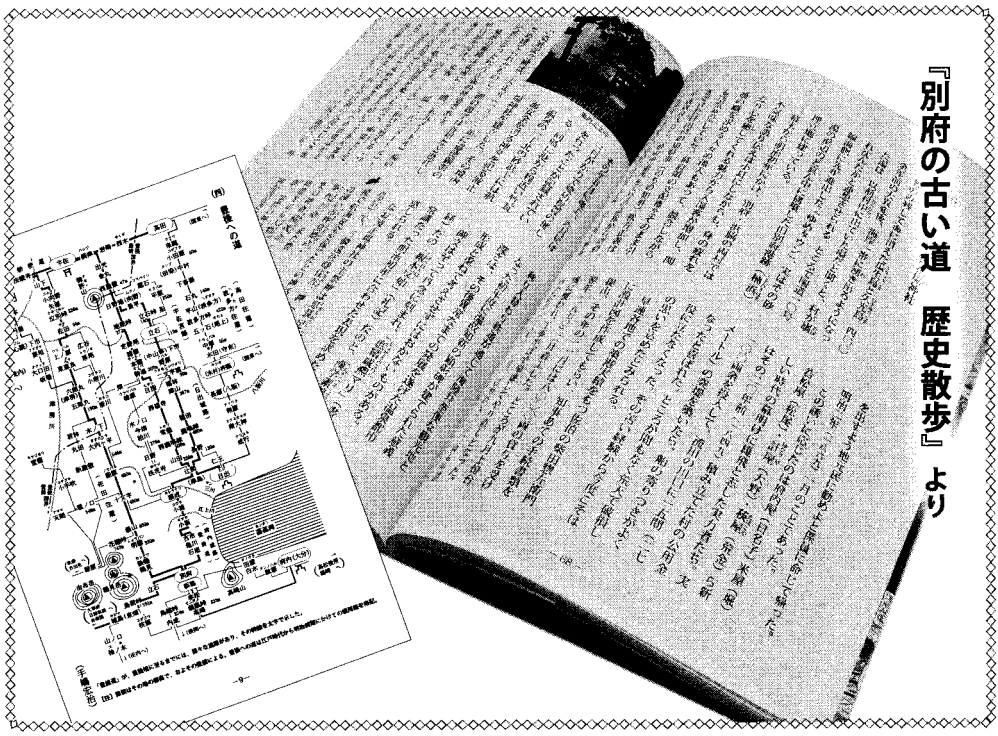
江上川右岸の河陰側は七尺（二メートル強）幅の土橋一本で結ばれていたという影平集落で、正面の丘陵上まで展開し



旧小坂村庄屋宅
（背景は隣接の小浦地区）

ている。浜蔵は港に近い地の利を生かし備荒用の郷蔵一棟と、横灘組（別府の幕府領諸村連合組織）はじめ杵築・玖珠の幕府領各地からの年貢米を一時収納し廻米船に引き渡す津出し浜蔵三棟のほか、役人らの詰所も置かれた。重責を果たしてきた地元庄屋高倉家の気品のある旧宅は、土橋から程近いものの小坂村の最北端。幸いにも現住家屋ながら昔日の面影が保たれている。

難路の鹿鳴越に対し坂道多く石多くで悪路とされた小坂。海を見下ろす丘の上の村だけに生活条件は厳しい。影平から上の原の八坂神社前、上舞、森と水路沿いの道をたどれば棚田の広がりが他村領からの貰い水あってのことと理解できる。海岸伝いの道は八郎鼻などの断崖があり、崖崩れ頻発で旅人向きでなかったので、水路沿いに取水口付近まで遡って川を渡り、再び耕作道を利用して古市、内竈門へ〝悪路〟が通じていたとみられる。のちに古市八丁堤へ通じる関の江にも板橋が架けられ、嘉永元（一八四八）年にはその南半分を石橋に架け替えていて、当時交通の便を図ることが急務とされたためと言えよう。



『別府の古い道　歴史散歩』より